
ビザンティンの象牙トリptyックと聖遺物容器

- プログラムの源泉推定の試み -

愛知教育大学 浅野 和生

ローマのパラッツォ・ヴェネツィア、ルーヴル美術館、ヴァチカン博物館にあるビザンティン時代の象牙トリptyックは、同じプログラムを持つ。以前発表者は、このプログラムは何らかの建築装飾を写したものであるのではないかと指摘した(『美術史』1988年)。これと同じプログラムを持つのが、リンブルク大聖堂博物館に収められた聖遺物容器である。

3点の象牙トリptyックのうち、一般に一番古いとされるパラッツォ・ヴェネツィアのトリptyックと、リンブルクの聖遺物容器(いずれも10世紀)は、次の共通点を持つ。(1)ヨハネがキリストの右側にいるデイスとそれを囲む多くの聖人像、(2)コンスタンティノス(ほぼ確実に7世)に言及した長いインスクリプション、(3)十字架の強調、である。このプログラムの類似の理由はまだ指摘、解明されていない。

ナンシー・シェヴチェンコは最近、リンブルクの容器に収められたいくつもの聖遺物は、なぜひとつにまとめられなければならなかったか、という問題提起をしている。彼女によれば、それは戦勝を祈って戦場に持っていくためであった。この点には賛成できるが、しかしシェヴチェンコも、この同じプログラムの作品が、10世紀からおそらく11世紀までの間に何点も作られた理由については述べていない。特異なプログラムが、違うジャンル、違う年代の作品にくり返し現れる理由は何だろうか。それは、これらの作品が、ある程度恒久的に多くの人が見る機会のある作品、すなわちある建築の壁画を源泉としているからだと発表者は考える。

それでは、これらの作品はどこの壁画をもとにして作られたものだったのだろうか。1988年には解くことのできなかつたこの問題について、発表者は新しい仮説を提示したい。戦場へ携帯することが可能な作品と、軍隊の勝利祈願と、マリアより高い位置に置かれる洗礼者ヨハネという表現を結びつける場所として一番可能性の高いのは、エブドモンの洗礼者ヨハネ聖堂である。エブドモンは、コンスタンティノポリスの西郊にあり、新首都建設直後から練兵場となり、宮殿や聖堂が建てられ、皇帝の即位式がおこなわれたこともあった。その建築群の中でもっとも重要だったのが、洗礼者ヨハネの聖堂である。これはユスティニアヌス1世によって6世紀に建てられた八角堂で、アラブ侵攻の際に荒らされたが、『続テオファネス年代記』によるとその後バシリオス1世が再興している(現存はしていない)。

ソゾメノスは、軍隊の出陣式がエブドモンでおこなわれたと書いている。『儀典の書』には、ここに軍隊が集結して、市内への凱進行進のはじまりとして使われていたと書かれている。エブドモンの聖ヨハネ聖堂に、ヨハネを記念してキリストの右側に置き、軍人聖人を含む多くの聖人像の並ぶ壁画があった、というのが発表者の推測である。もしこの推測があたっているなら、その聖堂の壁画を小型にして戦場へ持っていける作品が次々と作られても不思議ではない。また、逆に言うなら、そういう原型がなければ、同じプログラムが時代や素材の違ういくつもの作品に現れる理由は説明しがたいと思われる。

5月27日(金) 13:50 ~ 14:30 (第2分科会)